

「遊びと学びのコラボレーションによる地域交流 活性化システムづくりに関する研究」について

白梅学園大学 子ども学部

准教授 杉山 貴洋

杉山 平成22年の4月に白梅幼稚園に地域交流センターが建設されました。もともとは、幼稚園の改善・向上を目的に建てられたものですが、これは、文部科学省の「戦略的基盤形成支援事業」に採択された研究拠点という機能をもっています。「戦略的基盤形成支援事業」とは、各大学が、最先端の研究や地域に根差した研究などの観点から、研究プロジェクトを計画・申請し、文部科学省が審査の上で選定をおこなうものです。

そして、私たちが選定された研究テーマは「遊びと学びのコラボレーションによる地域交流活性化システム作りに関する研究―附属幼稚園を拠点として―」と

いう名称です。今回は、この研究委員会の発起人の一人であり、前白梅幼稚園園長の金田先生に、この研究とプロジェクトについてお聞きしたいと思います。

まず、金田先生は「遊び」を大切にされた保育を広く伝えていこうとしています。先生自身は、どのような子ども時代を過ごされたのですか？

金田 私の幼稚園時代は、とても心理的につらいものがありました。象徴的なエピソードを、ひとつだけご紹介したいと思います。

私は、いわゆる不器用であり、折り紙とか細かな製作が苦手な方でした。あるとき、茶色の折り紙で、糊とはさみを使って、馬をつくるという課題が出ました。私は、幼稚園では、一度も泣いたことはありませんでしたが、その時は、思うように作れず、泣いてしまいました。その時に、どうしてそうなったのかは分からないのですが、出窓のような所へ上げられてしまったのです。帰る時間になって、先生が馬を作って渡してくれました。しかし、少しも嬉しくはありませんでした。私が態度で「意思表示権」を行使したならば、「作ってなんか欲しいんじゃないんです。なんで馬を作るのか、そのわけが聞きたいし、作る必要があるのなら、作り方をもっとゆつくり分かるように教えて欲しかったんです。」と言いたかったのです。気性が激しく行動に出る子なら、渡された折り紙の馬を、ビリッと破いてしまったでしょう。しかし、私は、そんな行動をとることも、そんな気持ちも伝えることができず、そのまま折り紙の馬を家に持ち帰ったのです。

それから、もう一つの心理的苦痛が重なることになりました。私の気持ちからは、母の胸に飛び込んで泣き、嫌だった思いを訴えたかったはずなのに、それもできないまま、母は、折り紙の馬を、私が作ったものと勘違いして「じょうずね。」と誉めたのです。出来事を理路整然と言うことはできず、母の胸で泣くこともでき

ず、私は、先生が作ったものを貰ってしまった屈辱と、それをいかにも私の作ったものと思われたことを、そのまま受け流してしまった自分への不甲斐なさという、二つの納得のいかない、偽りの体験のつらさが大人になっても、年齢を重ねても消え去らない「つらさ」として残っているのです。

私は、こうした自分自身の経験のマイナスをプラスにしようとしてきたと思います。保育の在り方を考えるときに、このような体験がもたなくなって、幼児期には、みんなの中で感情を出すことができて、それを出して収める体験をたくさん積み重ね、みんなの中で自分らしく過ごせること、つまり「遊び」を重視する考え方が、自分の保育論の基礎になってきたように思います。

杉山 遊びを大切にする保育論をお持ちの金田先生が、遊び好きだったにも関わらず、それが壊された体験が、遊びを中心とする保育を求める原動力になったというのは、とても意外ですね。そして、遊びを大切にする白梅幼稚園の園長になられ、遊び心をテーマにした地域交流に取り組むことは、何かパラドックスを感じますね。

それでは、「遊びと学びのコラボレーション」による地域交流活性化システム作りに関する研究」について教えてください。

金田 この研究を一言で言うくと、「遊び心で地域がいき

いきとする仕組みを作り上げる」ことです。その過程で、様々な知恵やアイデアが必要とされると思いますので、その方法を探り、発見し、蓄積していくことだと思えます。既に、白梅学園大学・短期大学は、地域との連携を、様々なかたちで取り組んできています。そこで、白梅らしさを大切にした地域交流を、研究拠点の建設を機に見つめなおしてみたいと思ったのです。

杉山 地域交流に、なぜ「遊び」が必要なのですか？

金田 それには、まず、白梅幼稚園が「遊び」を大切に行っている幼稚園であることが重要になってきます。白梅幼稚園は、それこそ、私が園長になるずっと以前の久保田先生*の頃から、「遊び」を大切にした教育に取り組んできました。

(*久保田浩「遊びの誕生」誠文堂新光社 1974 久保田浩「子どもと遊び」誠文堂新光社 1984 参照)

しかし、今、その子ども心を大切に、遊びを中心としてすすめる幼児教育の必要性が、口では叫ばれているものの、現状では、小学校の準備学習のような内容になっていることも珍しくありません。そうした中で、私たちは、この附属幼稚園が「遊び」中心の教育と保育を發展させてきていることに、大きな意味があ

ると思うのです。

杉山 地域交流というと、大人の目線が多いものに対して、子どもの視点から考えるというのは、とてもユニークな試みですね。

金田 そうですね。世の中が、閉塞感に包まれ、余裕のない現代社会のなかで「遊び」の重要性が、改めて問われているのではないのでしょうか。「遊び」とは、人間にとって大切な動機であり、子ども期だけでなく、生涯遊び心を持ち続けることで、人生が豊かになるのではないかと考えられます。

ともすれば、遊びは、ゆとりや余暇と解釈されがちですが、自我の揺れ動きとしての「playfulness」(遊び心)の視点に立てば、生涯における発達の基礎となりうるものです。この「遊び心」を形成し「学び」につながる環境を、発達環境と位置づけ、発達環境が豊かな地域社会の確立に役立つことを検証していきたいのです。

また、「遊び心」とは、結果の損得ではなく、面白いからこそ熱中し、進んで世界の不思議や驚きに挑戦し、面白さを追究して、多様な発想で工夫に工夫を重ねていく、飽くなき面白さへの探求心のようなものです。人生において大きな仕事をした人たちは、おそら

くこうした性格を持っていたものと思われませんが、著名かどうかにかかわらず、「遊び心」を持っている人は、生涯、精神的に豊かな生活を送っていきけるのではないかと思います。

そして、街中が遊び心で満たされたとき、子どもも育ち良くなるのではないかと考えられます。なぜなら、遊び心とは子ども時代に、ほとんどすべての子どもが持っていた子ども心そのものであり、大人が「遊び心」を持っていれば子どもは大人に理解され、双方の心の交流が可能になるからです。幼少期のこの心持ちをまっすぐに育てられて大人になった人は生涯遊び心をどこかに持ち続けているのではないかと仮説できます。

地域交流に「遊び心」をテーマにしたのは、こういった理由があるからです。

杉山 この研究テーマは、複数のプロジェクトから構成されているんですね。その具体的な取り組みを教えてください。

金田 そうですね。具体的には、5つのプロジェクトがあります。5つのプロジェクトとは、下記の研究グループになります。このプロジェクトは、この研究のために作られたということではなく、これまで白梅が培ってきたものを集めたということになります。そし

て、2013年に向けて、それを統合していくことが課題になります。

(1) 生涯遊び心の形成による内面的地域活性化に関する研究

(2) 地域世代間交流による地域活性化に関する研究

(3) 多文化交流・児童文化研究

(4) 障がいのある子どもない子どもワークショップ実践的研究

(5) 食育でつなぐ幼稚園と生活科教育における研究

まず、第一は、(1)「生涯遊び心の形成による内面的地域活性化に関する研究」について、ご紹介します。グループ名は「生涯遊び心研究グループ」です。この研究は、子どもは、「子ども心」を遊びの中で豊にしていけるという仮説から始まります。しかし、現状の日本の社会では、年齢を重ねるに連れて、子どもこのころを忘れていってしまいます。今、子育てをしている親は、生きにくい社会の中で、他の子の育ちと比べて心配を募らせ、神経症的になっています。これは、子育てで世代だけの問題ではなく、どの世代も様々な競争の中で疲れていることが理解できます。地域交流を考えた時に、地域の活性化を、経済的な発展だけでなく、人間の生きる意味において活性化していくには、子ど

もも大人も、面白さを追求して、遊び心で地域をつなぐことが大切ではないかと考えています。そのため、この研究では、幼稚園を中心に、遊び体験をとおして広げ、遊び心で町をつなぐ実践を積み重ね、その成果を記録検証していきたいと思います。(チームリーダー：金田利子 前白梅幼稚園長)

第二は、(2)「地域世代間交流による地域活性化に關する研究」について、ご紹介します。グループ名は「世代間交流研究グループ」です。ここでいう「世代間交流」とは、子どもから青年・中年・高齢者まで、あらゆる地域の人が世代を超えて、共に学び成長する場をつくり、実践することを示します。幼稚園を地域の拠点として、大学生と住民の連携による世代間交流の実践、また「子ども、青・壮年、高齢者」という三世代の交流の実践を通して、地域・大学・学生の協力と互恵性を高めることが目的です。世代間の交流は、文化・歴史・芸術・生活技術を伝承する一方で、地域の良さの保護や、活性化をはかり、地域の課題を解決していく力があります。昔の歌や紙芝居など、地域の特性が広がる活動を実践し、その効果測定をおこないます。(チームリーダー：草野篤子 子ども学部教授)

第三は、(3)「多文化交流・児童文化研究」について、

ご紹介します。グループ名は「多文化交流グループ」です。白梅幼稚園には、様々な文化背景を持った子ども、入園してきます。地域の期待にこたえて、外国籍の子どもや障がいを持った子どもたちも少なくありません。地域の幼稚園として、どのように多文化共生のこころを育てていくのか、地域の保護者のつながりを、どのようにつくっていくのかをテーマとします。そして、共生を柱とした地域づくりを、生活の背景にある文化や言語を取り上げ、子どものアイデンティティの形成、環境整備、支援体制のあり方を研究していきます。また、外国籍の子どもたちが孤立しがちな地域の中で、どのように発達をさせていけるのか、地域のソーシャルキャピタルとの関連性も視野に入れて研究をおこないます。(チームリーダー：瀧口優 保育科教授)

第四は、(4)「障がいのある子どもない子どもワークショップ実践研究」です。グループ名は「だれでもワークショップ実践研究グループ」です。これは、昨年度まで、文部科学省が選定する現代GPのプロジェクトのひとつで、今年度から、小平市の療養教育の委託事業になっています。この研究では、障がいのある子どもも個別支援の構造化を確立し、障がいのある子どもも参加できるワークショップを作り上げることです。芸術活動と遊びは、大変よく似ていると言われます。

造形表現や、演劇活動を通じて、子どもたちが、どのように育っていくのか、そのためには、何が必要なのか、実践を通じて研究を進めます。楽しくてわかりやすい活動は、障がいのある子もいない子も参加できると言われます。芸術活動を通じた遊び心によるバリアフリーの地域づくりの手法形成を探っていきます。(チームリーダー：杉山貴洋 子ども学部准教授)

第五は、(5)「食育でつなぐ幼稚園と生活科教育における研究」です。グループ名は「おいしい部屋グループ」です。現在、小学校1年生における「小1プロブレム」が社会問題として注目されています。そこで、保育所、幼稚園、小学校などで具体的な方策を見出し、していくことが求められています。本研究では、幼児教育と小学校低学年の「生活科」教育を、食育を媒体として、就学前教育から小学校教育への円滑な移行の為の具体的な活動内容を実践・検証することを目的とします。地域交流センターにある「おいしい部屋」を通じて、地域に様々なメッセージを発信しながら研究をすすめていきます。(チームリーダー：林薫 子ども学部准教授)

これらの5つのグループの研究成果を、定期的に発表し、2013年に統合していきます。それぞれのプ

ロジェクトは、今、動き始めたところですが、様々なドラマが生まれてきています。5つのグループの小川が集まって、大きな川の流れになって地域の海が豊かになることを願っています。